



千原兄弟

新たなる二丁目お笑い帝王。

取材・文／端井 由紀子 写真／武藤育子 協力／吉本興業・二丁目劇場

The Real Face

SPECIAL INTERVIEW

Chihara Bros.

二丁目劇場のゆるゆる上がったいくエレベーターを仕立て、事務所のドアを開けると、デスクで千原兄弟の兄の方・靖史氏が大声で電話をしていた。以前吉本所属の某タレントを起用させていた表紙撮影で、タレント氏が現れず1時間待たされた経緯を持つ取材人は、それだけで安心してしまふ。

「僕らの「インタビュー」でしょ。早しましょう。」電話を切り上げて靖史氏が立ち上がる。だがホッとしたのも束の間だが吉本、マネージャー氏が現われて事実は一変である。「早しましょう」と言われた理由が、やっとなる。実に双方でアポイントの時間が30分も食い違っている。どうしてそんなことがと思う間もなく「えーと二丁目ね。9時で閉めなあかんのですわ。だから8時55分までね」とマネージャー氏。「ええっ。あと15分ですか?」「いや、写真も撮らるんですわ。ほな、ここより屋上の方がいいですか?」「いや、ちよつと待ってください。」言うてる間に現われた弟・ジュニア氏のいきなりの坊主頭。カメラマンと二人で釘づけになっているうち、気付けばまたゆるゆるエレベーターに逆戻りである。目指すは屋上。30分ものウエイティング・タイムに当然のことながら、二人の機嫌も愛想もいはずがない。背の高い彼らを見上げながら、私達は無言で屋上にむかっていた。

昨日より今日がおもしろいとかあかん。

わたしが言うのも何だが、若手お笑い世界は厳しい。これは確かである。吉本の若手養成スクールNSCには毎年9000人もの芸人志望が集まるが、入れるのは240人前後、一年後残るのは10組にも満たない。さらに売れてものに成るのは、一組出ればいいほうといふつまり、芸人になりたいヤツはいいはいいいるがなるのは難しく、当たり前だが売れるのもつと難しい。その中で千原兄弟は、確実に「残って」おり「売れて」いるコンビだ。先にNSCに入っていた兄が弟を誘いコンビを組んで今年で6年目。名前通りの本当の兄弟コンビは、あのダウンタウンを生み出した二丁目劇場で、今確実に頭一つ抜けている存在である。今やマツパでカルトなネタ、その愛想よしと言いつつ難しいルックスで中高生の女の子達をキャーキャー言わしている。が、そんなことが、彼らの探しているものすべてである。あつたはずがないことももちろんである。同じ顔では決して話せない兄と全く表情を変えずに話すジュニア。彼らは「活字の世界の人」に多分に不慣れを抱いており、身構えてもいたが、出てくる言葉はどれもストレートで正直であった。以下はそんな彼らのインタビューである。

今宮えびす出なあかん、いわれてそれで誘ったんですわ。(兄)



「まずこの世界に入るまでについてお聞きしたいんですが、子供の頃ってどんなでした?」

千原・兄(以下兄)「僕、このままですわ。もう子供の頃から全然変わらずに来たっていうか。」

「人を笑わせたりすることが好きだった?」

兄「いや、そうやってよく言われるんですけど。人笑かす前に、自分が楽しもうというタイプですか。」

「聞くところによると、ご両親がずいぶん変わってらっしゃるとか。」

兄「え?おとんとおかんが?はいはいはい。変わってるといふか面白いんですよ。」

「具体的にどんなところが?」

兄「いやもう、舞台でも言うてますけど、たとえばジャリズムの山下くんが遊びにきた時『君誰やったかいな、前にも来てくれたよね、山下くん』いや、知ってるやないか。みたいなそういう天然ボケですわ。でもとても好きな人達です。」

「それでNSCに先に入られたのは靖史さんの方ですかね。(うなずく靖史氏) さっかけは?」

兄「高校出たから一年遊んでたんですけど、やっぱりずっと好きで、やりたかったからっすね。」

「その後の兄弟コンビ結成までは?」

兄「僕が前に組んでたけどすぐコンビ別れて、それで相方ないてなかって。今年のはもう終わりでしたけど、今宮

えびすっていう漫才コンクールがありまして、それに出なあかん。とNSCのヤツは全員。て言われて、それで誘ったんです。」

「誘われた時は迷わず芸人になろう、と?」

千原・ジュニア(以下ジュニア)「いえあのねえ、あれですわ。高校行ってたから、行きながらなんなんかな、と。」

「質問状に絵を描き始めるジュニア氏。」

「兄弟コンビでよかったところとかやりにくいところって?」

兄「まあ、育ってきた環境が一緒やからなんとなくわかっただけで、兄弟やからなんて言うんですわ。言わんでもいいことまで言うてまう。」

「仲はいいほう、悪いほう?」

兄「いい、というわけでもないし。すごく悪いわけでもないし。」

ジュニア「でもやっぱり兄弟やからね。」

「仕事終わった後一緒に遊びに行くとか。」

兄・ジュニア「(口を揃えて)それはないです。」

兄「休みの日とか何してるかわからへんし。」

はじめ、ジュニア氏の方はずっと絵を描いて、ほとんどしゃべっていただけ。考えてみれば確かに会っていきなりのヤツに生い立ちが聞かれて、いい気するはずもないのだが、なかなか話しをする勢固気にならない。変わらな

いジュニア氏の表情を追ってカメラマンが息を切らしている。

自殺したいんです。(ジュニア)

「ところでネタはどちらが考えてるんですか？」

兄「弟ですわ。」

「全部？」

兄「はい。」

「秘密に作っていくのと、本筋だけ決めて、ていうのとタイプのにはどちらですか？」

ジュニア「えーとね、どうなんでしょね。まだいろいろですわ。」

「ネタによるということですか。思いつくのはどんな時？」

ジュニア「毎日、いつでも、です。」

「ネタで好きな芸人さんいますか？」

ジュニア「好きな芸人は？えーっとね、いろいろいますけどね。この人のことがとか、あの人のあてがとかありますからね。あの人が好きというところとニュアンスが変わってきてしまっ。」

「誰かを指して、というのはいんですね。じゃ自分達のコンビが他と一番違ってると思うところは？」

ジュニア「こわがりじゃないってところですか。」

「どういう意味ですか？新しいことをするのに、という意味？」

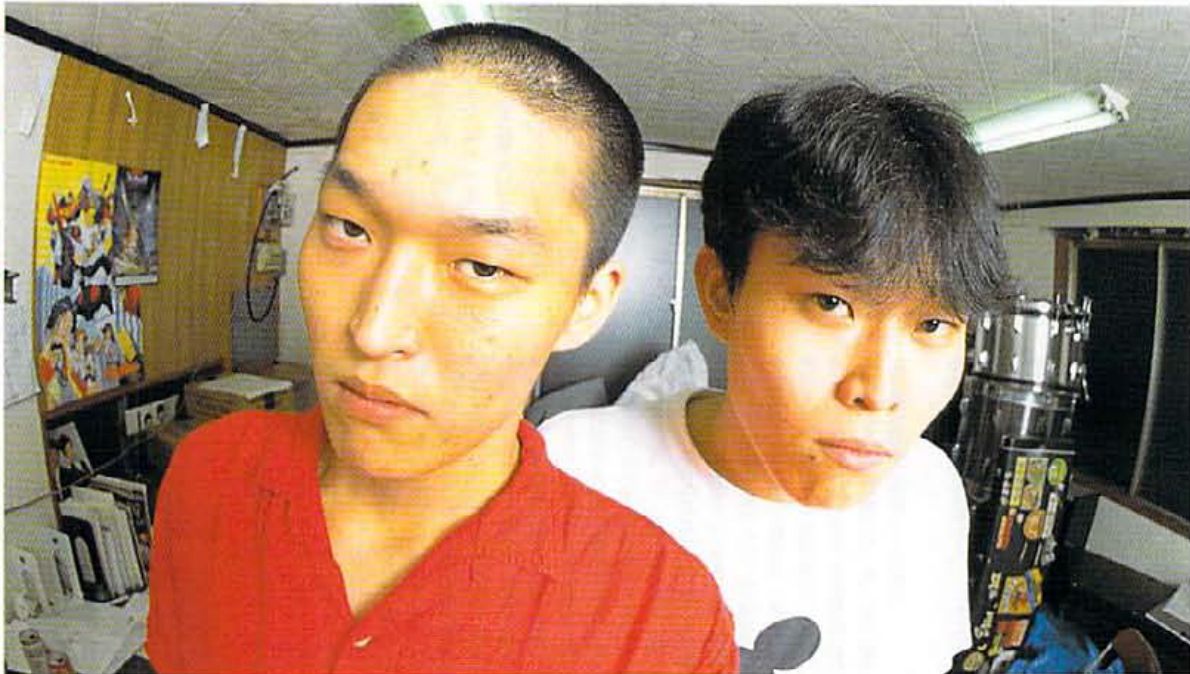
ジュニア「別にだから、いつやめてもいいからね。」

「それはまたどうして？」

ジュニア「自分を納得させる(言葉を選んでいる様子)自分が納得したら、僕はやめますから。死ぬまで息の長い芸人になりたいと思わないし、一番違うのはそこでしょう。」

「その後何かしたいことあるんですか？」

ジュニア「自殺したいんです。」



Chihara Bros.

「他の雑誌のインタビューでもおっしゃられてましたよね。それは実質的に死にたい、ということですか？」

ジュニア「えっとね、それまたね(沈黙)。一回取材でね、こうやって自殺したいって言ってね、もう、全部(力を込めて)説明して載ってる記事見たら『弟の夢・死にたい、っておいおい(笑)。』ってなってますわ。」

「なるほど。」

ジュニア「だから、伝えにくいんですけどね。」

「それは精神的な、ということ？」

ジュニア「こうなってるなって(手で山の形を描く)。芸人である人ってたくさんいるじゃないですか。実にかっこ悪いでしょ。芸人やってばりね、長く生きてるといふことは、昨日より今日の方が面白くないとかかんのです。ものも知っていきわけやし、人ともたくさん会うわけやし、ということも昔の方が面白いですよ。昔の方が面白かったのはファン心理であって、売れてきて皆のものになると、ちよっとテレビなんか出したらファンは言うでしょう。僕らもよく手紙もらったりしますけど、確実にしゃべってることにしても今の方が面白くないし、それはね。」

「それで日々上がって行って、頂点を極めたい、と？」

ジュニア「はい。」

二丁目で全国ネットの番組撮れたらちよもい。(兄)

ジュニア氏の「自殺したい」は何度か目にしてたし、彼がそれをどう説明してくるのかとちよも興味があったが、その言葉の奥には「ちよもいまでいく」という強気さと、挫折や失敗を許せない

性分が同居しているように思えた、ある種それは狂気だが、そのアブナさが彼をお笑いへと駆り立てているのだとすれば、やはり恐るべしジュニア、である。続きを聞こう。

「笑いの剣」とか最近テレビも多いけれどやっぱり舞台とは違う？」

兄「そらTVはやりにくいことはありますけど、いろんな規制もあるし。」

ジュニア「規制あるね。」

兄「それがTVですからね。ただTV見て面白かった人は、劇場来はつたらもっと面白い、とは思います。」

「TVに出てタレント化していく芸人も多いですか？」

ジュニア「オクレーでしょう。(きつぱり)そら皆タレントになりたいですよ。そんな子々作ってしんどい思いしたくない。別に僕がクイズのパネラーでもボケますし。僕の面白さなりかっこよさは伝わるし。」

「TVに出ていきたい？」

ジュニア「いや別に、大勢に見てもらえる一番ええ手段というだけで、こっちのやる側は変わってへんやろうし。ただクイズアル面では、やっぱりいいですよ。ちゃんとツラかぶってる方が面白い、とかね。」

「やっぱり最終的には東京へ？」

兄「だからもう(憤慨して)そういうと目標として東京目指して頑張ってるみたいですよ。それはもう結果であって、目指してとかそんなんちよもいすわ。目指してんのは、面白いことやり続けて周りも納得しいの自分もやりきってしまた、その時点でやめたいなあっていうことであって、東京行って仕事するとか、全然それは関係ないすわ。ついてくる結果なだけだわ。」

「一番ええのは大阪にいて二丁目で全国ネットの番組撮れたら、面白い(笑)。」

LADIES ONLY

LADIES ONLY



0120-194-198

テレホンクラブ

TELEPHONE-CLUB
1年1組
でんわ組

SubCall o75-822-1231

The Real Face

SPECIAL INTERVIEW

ジュニア「二丁目で撮った面白いので、苦情は、二丁目の中で一番多い。(ジュニア)」

いいものが出来ていけば、おの手を全国区に近付く、と。周りがそうなるだけで自分達のスタンスは変わらないという。向かっさいじとて、向かっさいじ悪いか。彼らの中ではしっかりと線が引かれていたよ。

一「ところで京都出身ですよ。」
兄「福知山です。」
一「ウチの本、どこでした？」
兄「知らんのですよ。」
ジュニア「入ってなかったんちゃう？京都いうても福知山やし。」
兄「福知山って隔離されてるからね。バツアロー吾郎の竹若が福知山着いた瞬間、「この街やこわい。」言いましたからね。」
一「二丁目のファンで若いですが、彼女達については？」
ジュニア「あのねえ、やっぱねえ、子供は好きでなくて聞かれて、ケンジ君は好きやけどケンジ君は嫌い、てある

じゃないですか。お客さんもいろいろですからね。」

一「変わったファンレターとか？」
ジュニア「芸人の舞台の立ち方にもよりますからね。俺に苦情が多いのは、俺の立ち方が他のヤツと違うからやろうし。」
一「苦情？多いんすか？」
ジュニア「二丁目の中では一番多い。」
一「たとえは？」
ジュニア「だから、死ぬとか。」

一「(笑) なんてストレートな。」
兄「だからそれ以上書けないんすよ。なんで嫌いなかわからなかったりして。」
一「なるほど。でも千原兄弟ってのりおさんとサプローさんにすごく支持されてますよね。もつと上の方達からの反応は？」
ジュニア「二丁目の笑いわからん」とか言われる？」

兄「いや、でもね、第一線でやってはる人はすごい分析して見てはりますからね。そないそない、そいうこと言わはる人はへんと思ひます。」
ジュニア「感性でしようね。若いヤツでも、なんでそんなネタすんねんおまえ、全然おもないやんけ、ていう芸

人もいてるし。」
一「やっぱりお笑いには二つ？マンネリでベタなもの新しいものと。」
ジュニア「いや、僕はそんなんわかりません。」
一「じゃ千原兄弟の野望であります？」
兄「野望(大声)？だからねえ、取材してはる人って、すごい家が貧乏で金持ちなろうと思つてこの世界入ったとか、言うて欲しいんでしょ。」
一「(笑) いや、そんなん思てませんよ。」
兄「今時そんなヤツいてませんかな。そんなん、たいそうや。東京にけんか売つてやる、とかいうてるヤツ。」
ジュニア「そんなヤツ売れへんし。」
兄「だから、もう知れてますからね。ジャック・ニコレソンみたいに無人島買って飛行機で移動、とか日本では不可能ですもん。」
ジュニア「野望ねえ。」
兄「でも、ただ一つ言えるのは真刻にやつてるよ、つてことですよ。」
一「同期は意識しますか？」
ジュニア「全然ないですわ。」
兄「いや、人のことかかめてるヒマないですかね。正直なところ。」

取材を一通り終えて、屋上の稽古部屋で撮影をさせていた。結局9時はとくにまわってしまつたが、彼ら二人は実に快くカメラの前に立つてくれた。靖史氏に、舞台ではいつもスーツですね、とわたし。

「あのねえ、楽なんです。どないして着たらええんかわからへん服とかあるでしょう。今は柴田蕨平のスーツですけれど、もう少ししたら館ひろしの着てるスーツにしようと思つて。」

「僕は、僕がかっこいいと思つたものを。」
最後のジュニア氏の言葉が、千原兄弟が何者であるかをよく表しているように思う。千原兄弟は、笑いの美意識ははりの芸人なのである。だから無茶苦茶おもろい。後日機会があつて、少女達に扮れ彼らの舞台を見ることが出来た。会場の熱気、期待に違われ強烈にマツハな彼らの面白さはもちろんだが、舞台の上で誰よりも深々と頭を下げる姿を見てはと胸をつかれる思いがした。そこにあるのはいつもの逆気な態度とは裏腹の、彼らのお笑いへの真摯な思いだ。お笑いに神様がいらるとすれば、今笑いかけているのは彼らだ。そう思わせる追い風の中に今彼らはいらる。

●プロフィール●
千原兄弟 (本名 千原浩史) 昭和49年3月30日生まれ 福知山市出身 入門 NSC8期生

千原 兄 (本名 千原靖史) 昭和45年1月25日生まれ 福知山市出身 入門 NSC8期生

平成1年6月コンビ結成 8月二丁目劇場NSC発表会にて初舞台

平成6年第15回ABCお笑い新人グランプリ最優秀新人賞 第29回上方漫才大賞(ラジオ大阪)新人賞